

特集

ランドスケープ研究の潮流と展望 ～学術知と実践知の融合に向けて

Trends and Perspectives of Landscape Research Integrating Academic and Practical Knowledge

ネット環境が整い、日常さまざまな場面で検索が行われる現代、学術研究論文や報告についても、キーワードや著者名を入力して「検索」をクリックすれば求めるものは簡単に手にはいる…。そんな時代に研究レビュー特集など必要だろうか？

こんな時代だからこそ「レビューは必要である」と強く言いたい。

ある視点、切り口から収集、分類、整理方向付けされたレビューには、レビュワーの意図と主張に基づいた研究の横断的な切り口が示される。検索がピンポイントで目的地に到着する「どこでもドア」ならば、レビューは風景を眺めながらゆく列車の旅である。風景からの発見が示唆に富むことはランドスケープに関わる者の共通認識だろう。

本特集で掲載された6分野8編のレビューは、読者に現在のランドスケープ研究の「風景」を示している。研究を始めたばかりの学生・大学院生には、各分野の現在の研究像を大きくつかむガイドとなるだろう。論文の書き出し、「本研究の背景」や「論文の位置づけ」には不可欠といえる。また経験豊かな研究者には研究の視野を再度見渡す機会になるだろう。読んでいて「するり」と当てはまるもの、「ざらっ」とした違和感が残るもの…。一歩立ち止まって、自らの研究の視点や価値観等と比べて欲しい。

これまで日本造園学会誌では、各分野ごとに何度かのレビューが特集されている。今回執筆者には、過去のレビューを遡り、その分野の大きな流れの中で最近の動向の特徴を浮き彫りをすることを特に意識して執筆してもらった。また、レビュワーの立場や視点もできるだけ明記してもらった。当然個々のスタンスには偏りもあり、完全に客観的な視点とは言いがたい部分もある。このことをご了承いただいた上で、本特集のレビューが読者の研究活動を相対化する一助となることを期待したい。

今回のレビューはそれぞれの分野のここ数年間の研究のまとめである。各分野に関するより長期間の深い考察のためには、必要に応じて過去のレビューを読み繋いでいただきたい。また本レビューが、数年後、さらに将来のレビューへの流れの一部となっていくことを期待する。